

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 23 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程
氏名	黒澤圭貴

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
日本・京都
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
第2回京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウム
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 12 日
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>京都大学-稲盛財団合同京都賞シンポジウムに参加した。京都賞とは科学技術や文化の発展に著しく貢献をした人に与えられる賞であり、今回は特にエレクトロニクス、生物科学、音楽の3分野が対象であった。私が参加したのは、そのうちの生物科学分野と音楽分野の2つの講演である。</p> <p>理学研究科生物科学専攻に所属する身として、本シンポジウム参加の主たる目的は生物科学分野の講演を聞くことであり、音楽分野はいわば「おまけ」のようなものと考えていた。事実、生物分野の講演はどれも人類進化の探求に対するロマンや情熱に溢れたモノであり、各講演者がどれほど自身の研究の価値を信じ、そして楽しんでいるかが伝わるものであった。しかし、その後におこなわれた音楽分野では、「おまけ」程度と考えていたことを恥ずかしく感じるほどの、生物分野と同等かそれ以上の衝撃を受けた。</p> <p>特に、音楽部門で一番はじめに発表された近藤譲氏の講演は、今回のシンポジウム全体を通して最も印象に残っている。まず、話の導入部の「音楽は単なる娯楽ではない。音楽の娯楽性が高まってきたのは近代に入ってからだ。」という言葉聞いて、神事としての音楽や、リズムに乗るチンパンジーのことを思い出し、ぐっと話に引き込まれてしまった。その後も娯楽音楽と芸術音楽の違いや、現代音楽のような無秩序に(構造的アーティキュレーションの欠如として)聞こえる音楽が何故音楽と呼べるのか、などといった問いに、自身のピアノの演奏を介して、彼なりの解釈を与えてくれた(講演はスライドを用いずにおこなわれ、壇上には近藤氏とピアノだけだったのだが、その「講演」とは一見ミスマッチな舞台環境が、近藤氏の講演をより印象的なものにしていただろうと思う)。</p> <p>しかし、非常に印象に残り感銘を受けたとはいえ、講演の内容は極めて抽象的であり、門外漢の私が一度聞いて全て理解できるような内容ではなかった。今回の近藤氏の発表を聞いて強く心に刻んだのは、他分野だと感じることも積極的に関わっていくことの重要性である。今回、たまたま京都賞シンポジウムの生物分野の講演のあとに音楽部門の講演が組まれていたから私はその講演を聞くことが出来た。しかし、もしこのプログラムの順序が違っていたりしたら、私は近藤氏の話聞く機会を持てなかっただろう。自身の専門性を高めていくことの重要性は疑わない。しかし、専門外のことも積極的に学ぼうとする姿勢を持ち、見分を広めることも同様に重要であろう。そのことが刺激となり、自分の専門分野に対する新たな見方が生まれれば、それは理想的であるとさえ思う。</p> <p>今後、大学院生として博士課程に進むにせよ、もしくは就職をして社会に出ていくにせよ、これからの世界は一般的に変化が大きくなると言われており、今まで直面していなかった問題にあたる事が出てくるだろう。そういったとき、1つの専門性だけを持っているのではなく、他の分野の知識も駆使してその問題に対して柔軟に対応していくことが求められるのではないだろうか。本シンポジウムに参加し学んだことは、「専門外を学ぶ姿勢」である。専門ではないということで「教養」という言葉でまとめられるのかもしれない。一般的に教養科目は単位を楽に撮れることもあり、ともするとないがしろにされがちな「教養」だが、その重要性を意識しながら、研究活動をはじめとして様々なことに取り組んでいきたいと思う。</p>
<b>6. その他</b> (特記事項など)